ひとはく研究員だより

高田 知紀 主任研究員

雨を愛でる感性 現代の日本にも

桜が散り、新緑が出そろった後、雨の季節がやってきます。「雨の日は足元がぬれるから嫌」という人も多いかと思います。しかし、雨の風景の眺め方や雨の日の過ごし方を少し工夫するだけで、そういった憂鬱な気分も一転します。

古来、日本人は雨を慈しみ、雨の風景を愛でてきました。例えば、新古今和歌集に式子内親王の次のような歌があります。

花は散り　その色となく　眺むれば　むなしき空に　春雨そふる

この歌では、「花」という言葉で一瞬きれいな色が浮かびますが、すぐに「その色となく」「むなしき空」でモノクロームの空間に引き込まれ、そこに「春雨」がシトシトと降る静かな雨音と湿り気を加えます。

伝統的な和歌の中では、桜だけでなく、藤や紅葉など四季折々の植物が雨にぬれる様子が好んで詠まれていました。雨の風景を愛でる感性は、江戸時代の代表的な浮世絵師である歌川広重や葛飾北斎、大正時代以降に「新版画」というジャンルの中で活躍した川瀬巴水や吉田博の作品にもみることができます。

雨は時に、人と人をつなぎとめる役割も担います。万葉集に次のような歌があります。

鳴る神の　少し響みて　さし曇り　雨も降らぬか　君を留めむ

恋仲にある二人が別れの時を前に雷の音を聞き、「雨が降ってくれたらまだ一緒にいられるのに」と期待する気持ちが詠まれています。有名なアニメ作品「となりのトトロ」でも、雨のシーンが重要な意味をもっています。雨の降る中、バス停でお父さんの帰りを待つサツキとメイが、となりに現れたトトロに傘を貸したことが、両者がつながるきっかけになりました。

こういった雨への豊かな感性は、現代の人びとにも受け継がれています。スマートフォンが普及し、誰もが日常の風景を気軽に共有できるようになったことから、そのカメラのレンズ越しの雨の風景に価値を見いだす人びとが多くいます。インスタグラムで「#雨」のハッシュタグの付いた投稿を分析したところ、季節ごとの雨の風景だけでなく、雨の日のファッションを楽しんだり、雨の日にカフェで過ごしたりする人びとの声が多くみられました。

雨の時期を前に、それぞれの雨の日の過ごし方を考えてみてはいかがでしょうか。雨の日に似合うお気に入りの本や映画を見つけてみたり、あえてテレビや音楽をかけずに雨音を聞きながら窓辺でコーヒーを飲んでみたりすれば、その時間と風景は特別なものに変わります。

㊤雨にぬれる草花

㊦夜雨の中のお祭り

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。